

事業の名称

学校と田畑をつなぐ地域サポート農学プロジェクト －あみ食育の新展開に向けて－

〔事業責任者〕

(自治体等側)

阿見町教育委員会学校教育課・課長 菊池 彰

(大学側)

茨城大学農学部・教授 安江 健

事業テーマ：地域の教育力向上

連携先

阿見町教育委員会、阿見町農業振興課、JA 茨城
かすみ阿見営農経済センター

プロジェクト参加者

安江 健 (茨城大学農学部教授・プロジェクト代
表：本プロジェクト全体の企画・調整・
総括)

菊池 彰 (阿見町教育委員会学校教育課・課長：
阿見町の行政部分全体の企画・調整)

村松利一 (阿見町農業振興課・課長：学校農園を
活用した食育事業、および小学校での
食育授業の企画・実施)

宮本英紀 (JA 茨城かすみ阿見営農経済センター・
センター長：学校農園を活用した食育
事業の企画・実施)

高田圭太 (茨城大学農学部FSセンター・業務係長：
FSセンターを活用した親子での栽培・
収穫・加工一貫体験の企画・実施)

篠田優香 (茨城大学農学部地域環境科学科3年・
のらボーイ&のらガール代表：学校農
園での食農教育事業への参画)

宮口右二 (茨城大学農学部准教授・研究推進委員
会地域連携担当副委員長：小学校での
食育授業への教員・学生の派遣調整)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

農学部では阿見町農業振興課と連携して、地元

小学校において平成21年から地場農産物を用いた学校給食による食育活動を展開しており、全国でもユニークな取り組みとして注目されている。本プロジェクトでは、いままでの取り組みをより発展させ、農学部内の教育研究資源（フィールドサイエンス教育研究センターを含む）を活用し、児童や教員および保護者へ「農」のもつ地域環境保全機能や「食」のもつ健康機能について科学的理解を深める取り組みへと発展させることを目的に、平成25年度から開始したプロジェクトの2年目に位置づけられる。

②連携の方法及び具体的な活動計画

具体的な活動として、従来から実施している1) 大学教員の小学校への派遣授業を充実し、2) 地元JAが主催する各学校農園へ教員や学生を派遣することによる食農教育の充実化、3) 観光農業育成に向けた親子による栽培・収穫・加工一貫体験、に取り組む。特に本年度は、これら1)～3)に学生を積極的に参画させる工夫を図ることで、本学農学部生の「地域での学び」を促進すると同時に、実施者（大学教職員やJAの職員等）と受益者（児童とその保護者等）間の敷居の低減化を促進する。1)については従来から町農業振興課とともに実施してきた実績を踏襲・発展させるとともに、2)については、圃場管理の補助業務だけではなく、実際の授業や成果発表会の場にも学生が参画できるよう、町教育委員会（各小学校）と地元JAの間で調整を図る。3)については本学FSセンターが企画・実施しているが、町教育

委員会を通して広く町民に広報いただくことで、参加者の増加を図る。

③期待される成果

これら 1) ～ 3) の実施により、農学部のもつ農学教育・研究機能を地域の教育力向上に直接資することができ、阿見町という地域コミュニティにおける茨城大学の特徴的な役割が発揮できる。加えて小学校児童を含めた地域住民との交流を通して、本学農学部の学生に「地域」に目を向けることの重要性和そこから学ぶ楽しさを教育できる機会も提供することができる。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

上記 1) ～ 3) それぞれの今年度の活動実績は以下の通りである。

1) 阿見町小学校における食育授業への講師と学生の派遣

平成 21 年度から阿見町農業振興課とともに実施してきた事業の継続・発展の食育授業であり、平成 25 年度からは茨城県立医療大学からも講師を派遣いただいて、「食材の生産・加工・流通過程」の説明（農学部）と「食材の健康機能」の話題（医療大）の両面を講義している。今年度も以下の通り計 6 回実施したが、後半の 3 回分については、農学部の担当部分を農学部の学生（学部 3 年生）に講義してもらうように内容を工夫した。具体的には表 1 の日程および内容で、延べ 3 名の教員と延べ 8 名の学部 3 年生を講師として実施した。個々の回の実施内容については農学部の HP にすべて掲載しているので、詳細はそちらを参照いただきたいが、やはり大学生のお兄さんお姉さんが話す授業は総じて子供たちに好評で、質問時間が毎回足りなくなるほどの活況ぶりであった。また、講師として参加した学生は必ずしも教職志望者ではなかったが、小学生相手に「わかりやすく説明する」工夫を通して、自分たちの卒業研究や大学での講義の「意味」を体感できたようである。

表 1 小学校での食育授業実績

日付	題材	対象学校	講師
6/26	スイカ	阿見小 6 年	東尾久雄
7/3	メロン	君原小 4 年	東尾久雄
10/23	お米	実穀小 5 年	新田洋司
11/25	白菜	吉原小 5, 6 年	学生 3 名
12/2	ヤーコン	舟島小 3 年	学生 3 名
1/26	牛乳	阿見第一小 4 年	学生 2 名



図 1 学生による授業風景（ヤーコンの日）



図 2 スイカの切り分け体験

2) 阿見町小学校における学校農園を活用した食農教育への学生の参画

従来、JA 茨城かすみ農協が阿見町の要請を受けて事業化してきたが、補助事業年度の終了に伴い、JA 茨城かすみ農協の単独では 8 校全てでの実施が困難となり、町も事業として予算を捻出することができず、規模の縮小が余儀なくされていた。そこで昨年度より本プロジェクトの支援を受け、JA 茨城かすみ農協の学校農園を活用した食

農教育事業に茨城大学の教員と学生が参画することで、阿見町の全8校の小学校全ての食農教育を展開している。今年度は昨年度と同様、各小学校の学校農園における作物栽培管理を補助する業務に学生を派遣することに加え、それらの作物を活用しての授業（総合学習の時間）や成果発表会（作品発表会やコンテスト）などに学生が参画できるように調整を図り、参加学生への教育効果を高める工夫を図った。各小学校での本年度の栽培作物は、従来通り各学校の要望に応じて表2に示す通りであり、作付け後の5月～収穫時の11月まで、毎週1校あたり2～3名の学生が全8校の小学校を回って除草などの栽培管理を補助した（図3）。

これら学校農園への栽培管理補助は、昨年度と同様、本学農学部2～3年生が中心となって結

表2 各小学校での栽培作物

小学校名	栽培作物	対象学年
阿見	落花生	4年生
	ジャガイモ	6年生
阿見第一	落花生	2年生
	ジャガイモ	6年生
阿見第二	落花生・ゴーヤー	4年生
	ジャガイモ	6年生
	サツマイモ	全学年
本郷	サツマイモ	2年生
	ジャガイモ	6年生
	インゲン豆	他学年
吉原	落花生	4年生
	ジャガイモ	6年生
	ヤーコン	3年生
実穀	ゴーヤー	4年生
	ヤーコン	4年生
舟島	落花生・ゴーヤー	
	ヤーコン	4年生
君原	落花生・ヤーコン	
	サツマイモ	1・2年生
	ジャガイモ	6年生
	ゴーヤー	4年生

成している「のらボーイ&のらガール」が、学生地域参画プロジェクトの一環として積極的に参加してくれた。昨年度はこれら学校農園の栽培管理業務の内容が学校の先生方に十分伝わらず、学校の教育現場にも積極的に参画できなかったという反省点から、本年度は各小学校に「作業管理ノート」を置かせてもらい、実施した作業内容を毎回記録し、担当の先生に返事を書いてもらうよう工夫した（図4）。自身の講義の合間を縫っての炎天下での管理作業はさぞ大変であったろうが、これら作業管理ノートでの情報交換を通して小学校との意思疎通が改善し、各学校での授業（図5、6）やイベント（図7）にも参画することができた。このことは、児童や先生といった地域の人々とともに収穫を体験できる喜びとともに、子供たちの成長に直接触れる場に同席できるというより大きな経験を、参加した学生全員に共有させたことと思われる。またこれら一連の活動を通じて、子供たちから手渡された感謝状（図8）は、何にも代えがたい喜びと思い出になったであろう。このように、事業実施主体であるJA茨城かすみ農



図3 炎天下で除草する学生たち



図4 小学校との意思疎通ツールとして設置した「作業記録ノート」



図5 総合学習の時間での落花生播種体験



図7 収穫祭での成果発表にお呼ばれ



図6 お姉さんとの調理実習



図8 子供たちからの感謝状

協や各小学校はもちろんのこと、子供たちやその父兄とも、作物を栽培してその作物の特徴や利用法を学ぶことの楽しさを学生たちが共有できたことは、本事業の最大、かつ最高の成果であったと考えられる。

3) 茨城大学農学部 FS センターでの親子による栽培・収穫・加工一貫体験

本事業は前年度より新たに着手した事業であり、本年度より本格実施に向けて計3回計画した。しかし天候の具合で予定よりも栗の収穫期が早まったことや、宣伝が不十分で参加者が集まらなかったため、2月に再度企画・広報して実施した。つまり実際に開催できたのは残念ながら柿の収穫・試食体験（参加者2名）と小麦からのパン作り（23名）の2回であった（表3）。

11月に実施した柿の収穫・試食体験では、まず講義室で職員より柿の種類や脱渋方法の説明を聞いた後、実際に果樹園で柿の収穫作業を体験した（図9）。その後、自分たちで収穫した柿も含め、

表3 FS センターでの一貫体験

日付	内容	参加者数（親+子）
10/18	栗の収穫・試食	実施できず
11/16	柿の収穫・試食	2 (1+1)
11/29	小麦からのパン作り	実施できず
2/7	小麦からのパン作り	23 (10+13)

数種類の柿を食べ比べた（図10）。中には渋柿も含まれていたが、参加者は「実際に渋柿を食べるのは初めてで貴重な体験ができた」と喜んでた。2月に実施した小麦からのパン作りでは、簡易製粉機による小麦粉作り（見学）や加工室内においてパン作り（図11）、圃場において栽培している小麦の生育状況を見学した（図12）。パン作りは発酵の間に待ち時間が生ずるため、本年度は待ち時間中にグルテンを取りだす実験や強力粉と薄力粉の違いについて説明をしたことにより、「勉強になった」「保護者も楽しめてよかった」といった感想が寄せられた。参加者が少ないという問題点はあるものの、参加した親子については総じて好評で、参加者へのアナウンスを改善することで、



図9 親子での柿収穫体験



図11 親子でのパン作り（成形）



図10 柿の食べ比べ体験（渋柿含む）



図12 小麦粉の基となる小麦圃場の見学

観光農業育成に向けた親子体験の場としての当初の目的は達成しようと考えられる。

②プロジェクトの達成状況

1) の食育授業に関しては、従来からの継続であることに加え、本年度の後半からは学生が積極的に授業に参画してくれたことから、ほぼ完成形に達したと考えられる。つまり、大学教員と小学生の間に存在する「敷居」の低減化は、学部学生を介在することで見事に達成できた。加えて教職志望の学生にとっては、本学の「教職実践演習」で使用する「学びのあしあと」に記載して自らの教育体験の振り返りに活用できた点で、教育効果を高めることができたと考えられる。

2) の学校農園参画事業については、前年度同様8校全てでの食農教育が達成できたことに加え、参加した学生の「地域」に対する興味や課題意識が醸成できたこと、および「子供たちに農作

業を指導する責任と喜び」という何にも代えがたい体験を本学の学生に付与することができたという点で、本プロジェクトにおいて最も成果をあげた部分であると評価できる。

一方、昨年度から新たに立ち上げた3) の事業も、実際の農作物を相手にする体験学習であるが故の困難さや、広報活動のむずかしさなど、様々な実施上の問題点が明らかになったものの、収穫・試食（柿）や加工・試食（小麦）の一貫体験を2回実施することができ、参加者の評価も極めて高かった。問題点も明らかになったことで、準備期間としての立ち上げは十分達成できたと評価できることから、次年度以降は安定的な開催を目指したい。

本学のFSセンターが中心となって実施している3) の事業は別として、町の食育・食農教育事業の一環として茨城大学が協働して取り組んできた1) と2) の事業については、国と県に採択

された「スーパー食育スクール事業（SSSと略）」の一環として、本年度より大きく動き出している。図13は、本年度作成された町の食育・食農教育事業の広報パンフレットであるが、左上の「学校給食推進事業」が上記1）、右上の「食に関する授業実践」の一部が上記2）の事業に相当し、阿見町の食育・食農教育に大きな位置を占めるに至っている。もはや茨城大学農学部を中心とする学生たちの参画は、阿見町の食育事業に無くてはならないものになりつつあるという点で、本プロジェクトは半ば成功を収めつつあると評価できるだろう。

③今後の計画と課題

上記の通り、本プロジェクトの1）、2）部分については、本年度でほぼ完成形に達したと考えられることから、次年度以降もほぼ同内容、同規模の開催を継続する。加えて、阿見町の食育・食農教育では従来より「動物（つまり畜産物）」部分が弱いことを考慮し、次年度は2）部分の一環と

して、学校に動物（ヤギ）を訪問させる取り組みを試行し、将来的には総合学習の時間等での活用につなげたい。3）についてはとにかく参加者の確保が最大の課題である。本年度は作物の生育状況に合わせて広報することができず、1）2）の事業との関連付けも全くできなかった。1）や2）の事業で教員や学生がせっかく各小学校へ通っているわけなので、そこで3）の広報や募集も実施できれば、1）～3）相互の関連性も図れるものと考えられる。本年度は日程上の都合で3）の事業に関しては学生が全く参加できなかった。1）や2）の事業で明らかなように、学生が積極的に参画できる事業では、その実施効果は極めて高い（特に児童や父兄を対象とする場合）。次年度以降、安定的な実施体制が整えば、積極的に本学学生にも参画してもらうことで、本学学生への教育効果も期待できる。学生の積極的参画こそが、結果的に1）～3）の事業を円滑に、そして有機的に実施できる鍵となるように思われる。



図13 阿見町の食育に関する紹介パンフレット